

開かれゆく会話のためのリフレクティング：二つの事例から

矢原隆行

はじめに

近年、リフレクティングについて、オープンダイアログとの関わりにおいて述べる機会が増えたように思う。本特集もまた、オープンダイアログを表題に掲げたものであるから、読者の多くはオープンダイアログへの関心を経由して初めて、あるいは、あらためてリフレクティングに出会うことになったのかもしれない。今回、二人の編者から筆者への依頼は、オープンダイアログのキモとも言われるリフレクティングについて、その「事例」と「作用メカニズム」に重点を置いて論じることであった。そのため、本稿では、Andersenらによるリフレクティング・トークの事例を紹介するとともに、そこでリフレクティングとして何が行われているのかについて見ていきたい。ただし、矢原(2016)でも強調した通り、リフレクティングは決してマニュアル化可能な新奇な会話形式やテクニックに留まるものではない。多様な意味の広がりや転換していく文脈のなかで、リフレクティングの働き自体もつねに展開していくゆえ、そこに薬剤の作用機序のごとき説明を期待すべきでないことは言うまでもない。

## I リフレクティングとは

そもそもリフレクティングとは如何なるものか。家族療法に馴染みのある読者であれば、2000年前後にナラティブ・セラピーの主たる三潮流の一つという位置づけで本邦に紹介されたリフレクティング・チームについて、すでに御存じかもしれないが、簡単に温習しておこう。

1985年3月のある日、当時、ミラノ派家族療法の影響のもとで実践と探求を重ねていたノルウェーの精神科医 Andersenらは、一人の若い医師と家族との面接をワンウェイ・ミラーの背後から見つめていた。長きにわたる悲惨な状況の中で、他のことが考えられなくなっているその家族に対し、なにか楽観できるような質問をするようにと三度にわたりワンウェイ・ミラーの背後の別室で面接者に指示を与えた Andersenらは、面接室にもどった医師がすぐにまた家族らの悲惨さのなかに引き戻されてしまう様子に直面し、数年前から温めていたアイデアを実行にうつす。そう。面接室のドアをノックし、家族にしばらく

自分たちの話を聞いてみたいかどうか尋ねたのである。この提案は Andersen の予想に反して家族に受け入れられ、画期的な「何か」がそこで生じる。Andersen らの会話が一段落し、ふたたび明かりの切り換えられたミラーの向こうには、先ほどまでとは大きく異なる家族の姿があり、彼らは短い沈黙の後、互いに微笑みながら今後について前向きに話し始めたのである。こうして生まれた新たな面接形式は、家族や面接者も含め、関わったすべての人々に気に入られ、リフレクティング・チームという名で広く世界中に知られるようになる。

当初のリフレクティング・チームは、ワンウェイ・ミラーの背後に専門家チームを置き、面接中にチームを利用するという点では従来のミラノ派の方法と似ているが、ミラノ派がクライアント家族にチームの協議の模様を見せなかったのに対して、そのやり取りのすべてをオープンにする点で大きく異なる。また、家族に対して積極的介入を行わないこと、先入観を避けるために面接前の専門家間での協議を行わないことなども、従来の方法とはずいぶん異なる。ある意味、あまりに無防備に見えるその方法は、当時の家族療法家たちに大きな衝撃を与えるものだったという。

この実践の理論的含意について簡単に述べるなら、まず、ワンウェイ・ミラーを挟んだ二つの部屋の明かりと音声を切り換える、というごくシンプルな試みにより、従来の<観察する者=治療者>/<観察される者=クライアント>という固定化された一方向的な階層構造を大きく転換させたことが指摘できよう。このことは、クライアント側はもちろん、専門家側にも、既存の文脈に新鮮な風を通すような決定的な変化をもたらす(矢原, 2015)。また、この転換により、専門家たちの(唯一の正解を競うのではなく、多様な視点がそれぞれに尊重されるような)やり取りをながめているあいだ、クライアント側はこれまでになかった内的会話の促進の機会を得ることができる。そして、それこそが「内的会話(きくこと)」と「外的会話(はなすこと)」という二種の会話を丁寧に重ね合わせ、うつし込み合わせながら展開していくリフレクティングの特質をもたらすことになる。

以上、ごく急ぎ足でリフレクティング・チーム誕生の場面とその含意に触れたが、後年、「僕は、リフレクティング・チームという言葉はなくなればいいと思っているんだ」(Malinen et al, 2012=2015: 87)と嘆じた Andersen にとって、この形式は多様なリフレクティング・トークの一例に過ぎず、彼がワンウェイ・ミラーを必要としなくなるのに時間はかからなかったし、その実践はより普遍的なリフレクティング・プロセスへと深化していった(矢原, 2017)。オープンダイアログにおけるリフレクティングもまた、リ

フレクティングの側から見れば、あくまでリフレクティング・トークの多様な活用領域の一つであると言えるかもしれない。ただし、次に述べるように、その縁は決して浅からぬものでもある。

## II リフレクティングとオープンダイアログ

筆者が実践としてのオープンダイアログに出会ったのは、2013年9月、多様な領域でリフレクティングの活用が進展しているデンマークの状況を調査していた時のことである(矢原, 2014)。デンマークにおけるオープンダイアログの教育・研究を主導するためにODN(オープンダイアログ・ネットワーク)が設立されたのが2005年。同年2月に開催された記念すべき会議では、AndersenとSeikkulaによる講演、大グループによるリフレクティング形式のディスカッションが行われたという。その際に製作された“Åbne samtaler : snak ikke om det usnakkelige : interview med professor Tom Andersen og professor Jaakko Seikkula”(開かれた会話:話されないことについて話さない:Tom AndersenとJaakko Seikkulaのインタビュー)というDVDでの語りからは、二人が協働してオープンダイアログの国際的ネットワークを育ててきた様子が見て取れる。すなわち、リフレクティングとオープンダイアログの関係は、たんにオープンダイアログにおけるトリートメント・ミーティングの場面でリフレクティング・トークが活用されているということではなく、理念的にも、実践的にも、きわめて深いつながりを有する。

両者の出会いは、リフレクティング・チームを世界に知らしめた論文(Andersen, 1987)が『ファミリー・プロセス』誌に掲載されて間もない1988年3月に遡る。Seikkulaと同僚たち五人は、冬の嵐のなかフィンランドのトルニオからノルウェーのトロムソに八時間も車を走らせ、Andersenのもとを訪ねたという(Andersen, 2006)。彼らはリフレクティング・チームと呼ばれる何かが北ノルウェーで生じていると聞き、それについて知りたがっていた。そして、Andersenが「とても興味深い」と感じたように、彼ら自身の側も語るべき多くのことを有していた。無論、まだオープンダイアログという言葉が生まれる前、フィンランド南部で展開されていたNeed-adapted treatmentの影響のもと、ケロプダス病院における初期の研究実践が始動しつつあった頃のことだ。以来、AndersenとSeikkulaをはじめとするケロプダス病院のスタッフらとの交流、協働が続いていく。

### Ⅲ 父親のような男の子

では、リフレクティングにおける会話とは、具体的にはどのようなもので、そこにいかなる働きが見出されるのか。まず、Andersen がリフレクティング・チームを初めて世界に知らしめた記念すべき論文 (Andersen, 1987) で紹介された事例を見ていこう (この論文では二つの事例が紹介されており、この事例はその一つめである)。いくつかの意味で興味深いことに、それはリフレクティングの失敗事例である。

教師として働く母親は、八歳になる息子が五歳の妹を殴ったことについて助言を求めて面接に訪れる。母親の頼みで同行した、漁師をしており留守がちな父親の様子からは、この面接に乗り気でないことが伺える。息子は父親が海上にいるときに母親の手に負えなくなるという。子どもたちが父親を大好きであることを母親が面接者に話すあいだも、満足していない様子の父親に気づいたリフレクティング・チーム (三名) は、アイデアの共有を申し出る。

#### 【リフレクティング・チームの会話①】

A: 私はお子さんたちにとってのご両親の大切さに、すぐさま心を打たれました。そして、お父さんが海から家に帰ってくるのを、お子さんたちとお母さんが待っているイメージを忘れることができません。全員がお父さんの帰りを心待ちにしている、たぶん、お父さんにとっても憧れている様子の息子さんは特にそうなのでしょう。

B: 彼はお父さんに憧れているだけでなく、お父さんがいない時には、代わりを務めたがっているように思えます。

C: あなた方二人の話聞いて興味深く感じました。というのは、私がお母さんが示された問題に留まっていたためです。その問題は確かに彼女を悩ませていました。

A: 私はなにより息子さんのお父さんに対する憧れを見ました。大変な敬愛です。

夫婦はリフレクティング・チームの会話の様子を熱心に見つめ、それに続く会話で、父親はより多く話し始める。面接者は父親とともに、子どもたちが彼と一緒に何をすることが一番好きかを話し合い、このことが子どもたちの喧嘩の話題につながっていく。それをどのように説明できるかという会話が続いたところで、リフレクティング・チームが再度アイデアの共有を申し出る。

#### 【リフレクティング・チームの会話②】

C: もしかすると息子さんは、お父さんの代わりを務める仕事をあまりに真剣にやろうと

しているのかもしれませんが。もしかすると息子さんは、妹さんの養育を自分が担当すべきだと考えているのかもしれませんが。もしかすると息子さんは、妹さんが自分と同じくらい反抗的で、腕力が必要だと考えているのかもしれませんが。

B: 最初に援助を求めたお母さんが、もしまだ援助を求めているのなら、お父さんと一番上のお兄さんは、お父さんがいない時にその息子さんが何をしたら良いか、そして何に気がつけたら良いかについて、真剣に話し合うべきかもしれません。八歳の小さなお父さんには監督が必要です。

ワンウェイ・ミラーが切り換えられた際、家族のいる部屋の静けさは、夫婦、特に父親が安堵しつつも、もう言いたいことがないことを示していた。父親の潤んだ眼と温かく固い握手は、彼が再び受容されたと感じているのだと思わせた。ところが、次の面接の折、母親は一人で現れ、父親がチームとの面接で役立つことが何も見いだせなかったことを話す。父親が面接に姿を見せなかったことに驚いたチームメンバーは、前回の面接を綿密に吟味するなかで、納得いく理由に気がつく。

以上が一つめの事例の概要であるが、彼らの誤りは那邊にあったのだろうか。リフレクティング・チーム形式の会話の進め方自体に問題はない。家族および面接者からなるグループと、リフレクティング・チームのコミュニケーションは、きちんと分けられているし、リフレクティング・チームにおける発言は、断定的なもの、批判的なものではなく、「私は～と感じました」「～かもしれません」といった控えめで推量的な話し方でなされている。実際、リフレクティング・チームの会話によって、当初、面接に乗り気でない様子であった父親の発言が増え、最後には安堵した様子さえ伺える。それにもかかわらず、父親はチームとの面接が役立たないと判断し、次の面接には現れなかった。

Andersen らが気づいた誤りとは、「父親が面接への参加を望んでいるのか否かを確認せずに会話を進めた」ということだ。我々の日常においてしばしばそうであるように、気づいてしまえば、誤りは実に単純なことと感じられるかもしれない。しかし、面接に乗り気でない様子の父親を前に、彼を面接に引き込むためのテクニックではなく、面接への参加希望を確認するというごく当たり前の丁寧さを強調する Andersen の姿勢こそ、リフレクティング・トークに取り組むうえで中軸に据えるべきものであると筆者には思われる。

「家族にあらゆる話し合いを利用できるようにしたからといって、必ずしも以前の戦略的なやり方が簡単に消失するわけではない」(Andersen, 1987: 425) と、Andersen はこの事

例について振り返っている。

#### IV ミーティングの前のミーティング、それからミーティング

二つめの事例は、フィンランドにおける三年間のトレーニング・プログラムの中でなされたミーティングである。三人からなるチームが、ある家族に参加を依頼し、Andersenにも話し合いに加わるよう求めた。聴衆は五〇人の訓練生とトレーナーであり、会場は、地元の図書館の階段教室だったという。とても豊かな内容を含むこの事例の全体については、Malinen et al (2012=2015) で読むことができるが、ここではとりわけ Andersen がリフレクティング・トークの場を創出するために、その導入部分で参加者それぞれに何を尋ねているのか、という点に着目して見ていきたい。

##### 【冒頭、家族が会場に到着する前のチームへの問い】

*家族が来る前に、言っておきたいことはありますか、あるいは家族が来るまでじっと待っていますでしょうか？*

リフレクティングにおいては、家族不在の場で面接前の専門家間の協議を行わない、と先に述べた。一見、それと矛盾するようなこの問いの意図は何だろうか。Andersen の問いに対して、チームのメンバーからは、今回の家族が選ばれた理由として、その家族に多くの精神病患者が居り、その事実チームのメンバーがとらわれていること。そして、問題とされている娘のふるまい（学校に行きたがらず、自動車教習所をやめ、友達ともつき合わず、幻聴がある可能性が高い）の原因に遺伝的なものが関係するのではないかと考えていることが伝えられる。そこで Andersen は、さらにこう問う。

*もしも家族がここにいたら、チームの心配に関する議論を聞くことは、彼らにとってどんなものだろうか？*

そう。Andersen は家族が来る前に専門家間で家族への対応策を協議しておこうと、冒頭の問いを行ったのではない。このミーティングが専門家チームの心配に家族を巻き込むためのものであれば、そこに家族の参加は必要ない、ということを示唆することで、あえてこの場の文脈を問い直したのである。

やがて、母親と一九歳の娘が会場に現れる。母親はとても集中していて、ほとんど出席者に気づいていない様子であった。娘は慎重に母親に従っていた。Andersen は、彼女たちの言語が話せないため、通訳の助けを借りなければならないことを詫び、どんなふうに通訳するのが彼女たちに望ましいかを尋ね、確認した後、家族へのはじめの問いを行う。

【家族へのはじめの問い】

あなたがたがすでにお聞きになったこと以外で、僕について知りたいことがありますか？

これを受けた母親に、「なぜここにいて、どこから来たのか」と尋ねられた Andersen は、彼がここで働く人々と長く協働していて、今回のプログラムに参加を要請されたことを率直に伝える。そのうえで、Andersen はさらに彼女たちに尋ねる。

僕らは、あなたがたが来る前に短いミーティングをしました。僕が聞いたことに興味がありますか？

この問いは、この場が彼女たちに対して全くオープンな場であるということ伝えるとともに、実質においても（あるいは、パフォーマンスにも）、この場をオープンな場として形づくっていくような問いであるといえよう。彼女たちはそれを聞いたがった。

Andersen は、彼女たちの家族についてチームが注意を引かれていること（すなわち、先に見た通り、家族に精神病患者がいるということ）を伝えるとともに、自分がチームに対して、その問題については家族の参加なしでもミーティングを持てるだろうと言ったことも伝える。そして、チームから家族について教えられていた娘の問題についても、家族に語られる。こうして一通り話を聞いた母親は言う。「ここに来られて良かった」。

以上、導入部分の紹介のみであるが、ここに Andersen のリフレクティングのエッセンスを垣間見することもできる。リフレクティングがセラピーの中で用いられるたんなる新奇な会話形式、あるいは、技法ではないことは、Andersen の一連の問いを貫く構えから十分に理解されよう。そこでなされていることは、何ら特別な仕掛けのない、すべての参加者がいま、この場での会話に安心してオープンに関わることを可能にするための文脈をつくる丁寧なやり取りである。

おわりに

ここで紹介した二つのリフレクティング・トークの事例から、読者は如何なるリフレクティングの働きを読み取られたらだろうか。1985年3月に誕生し、今日、オープンダイアログのトリートメント・ミーティングにおいても、その中心的方法として用いられているリフレクティング・トークの会話形式は、実践し、体感してみるならば、たしかに不思議なほど有用な会話の機会を涵養してくれるものである。しかし、会話が開かれゆくためにリフレクティングがなす働きの核心部分が、常にその会話の文脈を問い直し、開かれゆく

会話がそこに於いてあるような場を実現していくことにこそあることを忘れてはならない。

#### 文献

Andersen, T. (1987) The Reflecting Team: Dialogue and Meta-Dialogue in Clinical Work. *Family process* 26(4); 415-428.

Andersen, T. (2006) The Network Context of Network Therapy: A Story from the European Nordic North. in Lightburn, A. & Sessions, P., (eds.) *Handbook of Community-Based Clinical Practice*, Oxford.

Malinen, T., Cooper, S. J., Thomas, F. N. (eds.) (2012) *Masters of Narrative and Collaborative Therapies: The Voices of Andersen, Anderson, and White*.

Routledge. (小森康永、奥野光、矢原隆行訳 (2015) 会話・協働・ナラティブ: アンデルセン・アンダーソン・ホワイトのワークショップ. 金剛出版.)

矢原隆行 (2014) リフレクティング・プロセスからオープン・ダイアログへ. *家族療法研究*, 31(3); 294-298.

矢原隆行 (2015) コンテキストに風を通す: リフレクティング・プロセスとオープン・ダイアログ. *ナラティブとケア*, 6; 77-83.

矢原隆行 (2016) *リフレクティング: 会話についての会話という方法*. ナカニシヤ出版.

矢原隆行 (2017) オープンダイアログを殺さないための二様のリフレクティング. *ナラティブとケア*, 8; 27-33.